様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５４３

研究課題名（和文）英語史における付加疑問文の文法化・主観化研究

研究課題名（英文）The Study of Tag-Questions in the History of English from the viewpoints of Grammaticalization and Subjectification

研究代表者
福元　広二（Fukumoto, Hiroji）

広島修道大学・商学部・教授

研究者番号：６０２７３８７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語における付加疑問文の歴史的な調査を行い、現代英語のような付加疑問文については、いつごろから一般的になったのか、またそれ以前はどのような表現をしていたのかを調査した。
　その結果、付加疑問文は、初期近代英語期から見られるようになり、１８世紀の後半あたりから助動詞の縮約形の付加された現在のような形式が一般的になることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：I examined how tag questions have developed through the course of the history of English and when tag questions in the present-day English became common. I also investigated what kind of expressions were used before tag questions were established. I concluded that tag questions came into use from the early Modern English period, and it became clear that the tag questions seen today were commonly used from the latter half of the 18th century.

研究分野：英語学

キーワード：英語史　文法化　付加疑問文

１．研究開始当初の背景

文法化・主観化の研究は、２１世紀に入りますます盛んになってきており、通時的研究のみならず共時的研究も盛んに行われてきている。その枠組みは、音韻、形態、統語のみならず語用論、認知言語学などさまざまな分野へと広がりを見せ、国内学会でも、文法化を冠した研究発表やシンポジウムが行われている。

最近は、その一つの新しい流れとして歴史語用論的な枠組みからのアプローチがある。

申請者は、高田・椎名・小野寺（編著）(2011)『歴史語用論入門』(大修館)の第 3 章「文法化と（間）主観化」で、Traugott 教授の論文を翻訳し、文法化は歴史語用論でも重要なテーマであることを示した。

また本研究で扱う付加疑問文は、現代英語で見られるタイプだけではなく、主節に付加された文のすべてを含むのであるが、このような研究は、語用論標識や comment clause として最近行われている。

comment clause の通時的研究を行っている際に、中英語や初期近代英語期には、まだ付加疑問文は十分発達しておらず、その代わりに他の様々な表現で、付加疑問文のような機能を表していることに気がついた。その様々なタイプの付加された文は、これまでほとんど調査が行われておらず、このような背景から付加疑問文の通時的・包括的調査を行うという本研究の着想に至った。

付加疑問文に関する通時的な研究はほとんどないと言っても過言ではなく、従来は個別作家の文体からのアプローチが中心であり、そのほとんどは共感疑問文がテーマとなっている場合が多い。

２．研究の目的

本研究の全体構想は、英語における付加疑問文の通時的発達を文法化・主観化の観点から考察し、付加疑問文の全体像を浮き彫りにすることである。

英語における付加疑問文の確立は後期近代英語期頃であり、それ以前の古英語期から初期近代英語期にかけては、主文（主節）に様々な文が付加された。そこで本研究の目的は、付加疑問文の文法化がどのようにして起こり、現代英語のような平叙文に極性の異なる付加疑問がいつごろどのようにして用いられるようになってきたかを分析することである。

本研究では、英語における付加疑問文の通時的な調査を行うのであるが、現代英語の “Mary doesn’t like onions, does she?”のような主文に助動詞と主語の代名詞が付加されているタイプを通時的に扱うものではなく、もっと広い意味で、主節に付加された疑問文や肯定文も含んだすべてのタイプを扱い、それがいつごろ現代英語のように文法化・主観化してきたかを明らかにする。

まず助動詞 do が確立していない古英語、中英語、初期近代英語においては、どのような文が主文に付加されているかを考察していく。そして、主文に付加された文が、主文とどのような関係となっているのか、統語的・意味的・語用論的な観点から明らかにしていく。例えば、初期近代英語では、主文に、意味が希薄化された動詞だけが文末に付加されることがあり、この場合には、付加疑問文と同じような機能を表し、話者の聞き手に対する確認や同意を求めている。このような助動詞 do や be 動詞を用いた付加疑問文の確立していない時代は、付加疑問文と同じような機能をどのような表現で表していたかを考察する。また、現代英語と同じような付加疑問文が発達してくる後期近代英語においては、それまで見られた古い表現がどうやって廃れていくのか、そして新しく発生した表現はどのようにして文法化していくのかを分析していく。

３．研究の方法

本研究の研究計画としては、古英語期から後期近代英語期にかけて、広い意味での付加疑問文を通時的に調査するために、３カ年に分けてそれぞれの時代毎に研究を行った。まず 1 年目に古英語と中英語の調査を行い、2 年目に初期近代英語の調査を、そして、3 年目に後期近代英語の調査を行った。

研究方法としては、それぞれの時代の文学作品と史的電子コーパスを精読しながら、主文に付加された文を網羅的に拾い上げていき、前後の文脈を参考にしながら、付加された文がどのような意味と機能をしているかを分析した。

古英語と中英語においては、現代英語のような付加疑問文はまだ見られないので、まず複文や重文となっているものを丁寧に拾い上げていく。そして主語と述語動詞がそれぞれどのような関係を表しているかに着目して分類した。

また、comment clause となっている用例も収集し、文頭、文中、文末のどの位置に見られるのか、また補文標識の that は省略されているかについて考察を行った。そしてそれらの例が意味的に命題を表しているのか、それとも文法化・主観化されているのかを検証していく。また語用論的にはこれらの用例の話者の意図についてポライトネスの観点からも分析した。

初期近代英語においては、その用例数やバリエーションなどが多く見られることが予想されたため、現代英語のようなタイプの付加疑問文と、comment clause タイプの用例、そしてそれ以外に見られる様々なタイプの用例と分類していき、時代とともにどのタイプが増加・減少していくかをみた。また助動詞 do の発達との関連も重要なテーマであるので do 付きの付加疑問文も肯定・否定などに分類して考察した。

４．研究成果

本研究では、英語史の中で、付加疑問文がどのように発達してきたのか、また現代英語のような付加疑問文は、いつごろから一般的になったのかを調査し、またそれ以前はどのような表現をしていたのかも調査した。

まず、古英語と中英語においては、予想通り、現代英語のような付加疑問文はほとんど見られなかった。これは、ジャンルの選択にも問題があったかもしれない。can や will や do などもまだ本動詞としても使われている時代であり、助動詞として確立していないので付加疑問文として使用されるのは難しいと思える。

初期近代英語期では、劇作品を中心に付加疑問文の調査を行った。１６世紀前半の作品では、まだ付加疑問文の頻度はかなり少ないことが分かった。しかし、この時代には、平叙文の後ろに I trow?のような表現形式が付加される例がいくつか見られたり、trow?という動詞だけが付加される例も見られた。

１７世紀前半になると、現代英語に見られるような、付加疑問文がしばしば見られるようになる。ただ、現代英語のように、肯定文には、否定の付加疑問文がつくのではなく、肯定文にも肯定の付加疑問文がついている例が多いことが分かった。これは、Tottie and Hoffmann (2009)の指摘している通りであった。また、文末に sayest thou? や think you?のような節が付加されたり、肯定文には、I hope?が付加されたりする例が興味深かった。また、is it not so? や is it not true? といった文が付加されている例もあり、これらは、付加疑問文ではなく、別の文であると考えることも可能である。その他には、平叙文の後ろに、ha? や then? などが付加されている例が見られ、これらの語も相手に確認を行う機能があることも分かった。

１８世紀になると、付加疑問文の頻度が多くなり、様々な主語や助動詞のバリエーショ

ンも増えることが分かった。しかし、be 動詞に関しては、主語に関係なく an ’t となっている例も見られた。そして、１８世紀後半から、現代英語のような、助動詞の縮約形の付加された付加疑問文が頻繁にみられるようになることも明らかにした。また、極性の異なる付加疑問文も確立するようになる。助動詞の縮約形の確立とともに、極性の異なる付加疑問文も定着してきているので、この時期を付加疑問文における文法化の時期であると結論づけた。

本研究成果の位置づけとしては、これまでの付加疑問の研究では、Salmon (1987), Hoffmann (2006)などでも現代英語のような付加疑問文の形式のみを通時的に調査したものであった。また、個別作家研究においても、ある作家における付加疑問文だけを調査したものがほとんどであった。しかし、本研究では、歴史語用論の観点から、現代英語のような付加疑問文だけではなく、平叙文や疑問文の文末に付加され、相手に確認したり、疑問を表したりする機能を持つ用例を収集した。その結果、付加疑問文がまた未発達の時代においても、それぞれの時代において、付加疑問文のような機能を表している用例が見られた。

今後の展望としては、まだまだデータを増やして付加疑問文や comment clause の全体像を明らかにし、両者の関係を考察していきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計　１　件）
① 福元　広二　「初期近代英語期における仮定法の衰退と I think の文法化」『歴史語用論の世界』（ひつじ書房）2014、297 (29-46)

〔学会発表〕（計　０　件）

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
福元　広二　（FUKUMOTO, Hiroji）
広島修道大学・商学部・教授

研究者番号：60273877

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：